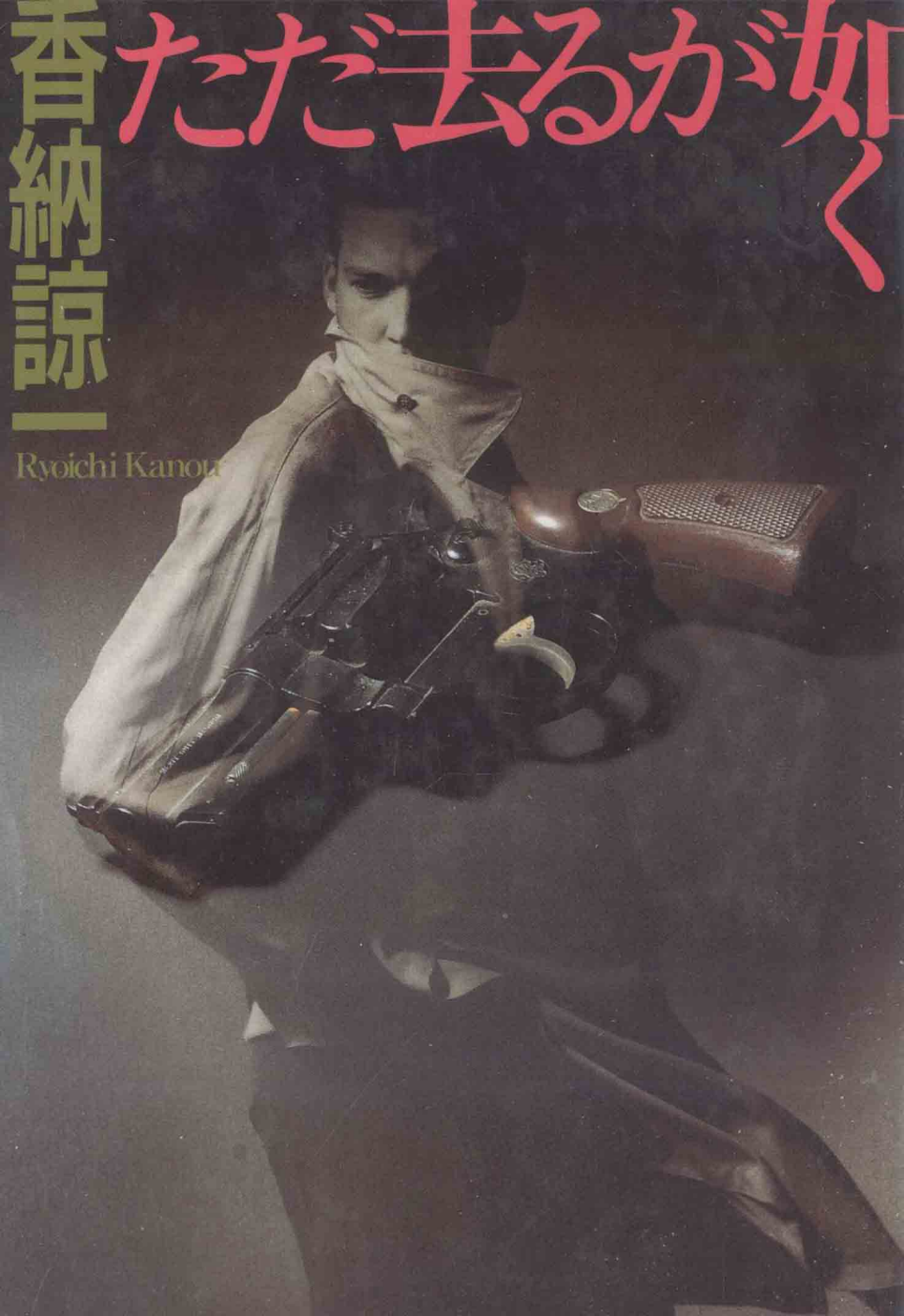
ただ去るが如く

香納諒一

Ryoichi Kanou



ただ去るが如く

香納諒一

Ryoichi Kanou

香納諒一（かのう　りょういち）
1963年横浜生まれ。早稲田大学第一文学部卒。1990年織田作之助賞入選。91年小説推理新人賞受賞。92年、『時よ夜の海に瞑（むな）れ』（祥伝社）で長編デビュー。96年、『梟の拳』（講談社）で日本推理作家協会賞候補。他の著作に、『石（チップ）の狩人』（祥伝社）、『春になれば君は』（角川文庫）、『風熱都市』（徳間書店）がある。

ハードボイルドの次代を担う新鋭として、今、最も期待されている若手作家である。

ただ去（さ）るが如（ごと）く

一九九六年九月二五日初版発行
一九九六年一〇月二五日再版発行

著者　香納諒一（かのうりょういち）
発行者　嶋中鵬二
発行所　中央公論社
〒104　東京都中央区京橋二-八-七
電話　販売部〇三（三五六六三）一四三一
編集部〇三（三五六六二）三六六四
振替　〇〇一二〇-四-三四

印刷　図書印刷（本文）
大熊整美堂（カバー・表紙・扉）
製本　小泉製本

Printed in Japan CHUOKORON-SHA, INC.

©1996 Ryōichi KANOU

ISBN4-12-002610-8 C0093

定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本はお手数ですが小社販売部宛お送り下さい。
送料小社負担にてお取り替えいたします。

ただ去るが如く

――もし人が単純な生活をして、自分の作ったものだけを食べ、自分が食べるだけしか作らず、わずかばかりの贅沢で高価な品物とそれを交換しようとしないならば、わずかに数ロッドの地をたがやせば足りること、そしてそれをたがやすのに牛を使用するより自分で鋤を入れたほうが、古い畠に肥料をほどこすよりは新しい土地を選んだ方が、安くつき、すべての必要な仕事を、いわば自分の左手で夏の間の片手間にすることができ、現在のように牡牛か馬か豚かに追い使われずにすむということ、を悟ったのである。

（ソーロー著『森の生活――ウォールデン』より）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

0

月のいい晩だったと、憶えている。

大都会のてっぺんに、でっかい月の輝きがあった。端が心持ちだけ欠けた月だ。地上からの照りかえしでうすまった空に、でんと居すわっていた月だ。

春風が、たばこの煙を運びさる。

「結局は、こうするしかねえってことさ。なあ、そうだろ、優さん」

市川剛の呟きを聞きながら、橋爪優作はたばこを足もとにはじき、靴の爪先で丹念にもみ消した。それからポケットの胡桃を鳴らした。身長はほとんど同じぐらいの男たちだ。橋爪のほうが躰つきがごつい。逞しい肩とは対照的に腰が細い。肉厚な手が、革製の手袋をはめているかにさえ見える。市川のほうは痩せがたで、月の光を吸いこんだように、心持ち青白い肌をしていた。陽光を浴びる倍以上の時間を、酒を浴びてすごすためだ。指ですかれた長髪が、ウエイブを描いてうしろへ流れている。毛の先を両耳に挟んでいる。

「ちょいとひとっ走り見てきますわ」

ふたりから少し離れたところで、駱駝のように首だけを物陰から突きだして、小さく足踏みを繰りかえしている男がいった。中根太。橋爪たちよりは下っ端で、年齢も五歳ほど違う。五分刈りの頭が四角い。橋爪と市川は同じ歳で、組の構成員になったのもほぼ同時期だったので、ため口をききあう間がらだった。「優さん」「剛さん」と、いうわけだ。

街灯に押し倒された影が、それぞれの足下にのびている。

そこだけアスファルトが濡れているかのようだ。

どこか遠くで、カラオケががなり立てている。

「落ちつかんやっちゃな。ええから少し、じっとしとれや」

市川が太にむけ、苦笑まじりに吐きすてた。「おまえがひとりで見にいって、出くわしてもたらどないするんや」

「そしたら、もちろんわしひとりで先手をとります

がな。兄貴たちは、黙って見ててください」
太はおどけて白い歯をこぼした。左頬にだけ靨が浮かぶ。どことなく幼い印象をかもす、かわいげのある靨だ。
目あてのマンションは路地の先だった。ここから大した距離はない。マンションには、囲われものの女が住んでいる。胸から先に生まれてきたような女で、囲っているのは石和組の幹部だった。橋爪たち三人が属する組だ。組長が倒れ、ごたごたがおり重なるなかで、その男が勢力をのばしてきた。
車が一台、マンションのエントランスにあらわれた。
メルセデス・ベンツ。携帯電話で呼ばれたボディーガードが乗っている。四、五分のうちに、幹部の長部慎太郎がおりてくるはずだ。そういう習慣であることは、すでに調べがついていた。市川が、喫いつづけていたたばこを、先ほど橋爪がしたのと同じようにはじいて消した。
橋爪は視線を太に投げたあと、無言で市川に顎をしゃくった。路地の裏手にむけて歩きだした。大阪のはずれ。深夜の二時をすぎている。小さな商店街の裏手にあたる。人どおりは途切れ、家々も静まりかえっている。地べたを埋めつくした昔ながらの町並みを、高層マンションがぽつぽつと穿って壊しつつあるような一角だ。
細い路地を直角に二度おれ、エントランスの真正面に駐車されている車の背後に回った。そっと様子を窺うと、太がボディーガードの男にゆっくりと近づいてくるところだった。ボディーガードは車に寄りかかり、マンションの窓を見あげながらたばこを抜きだしている。近づいてくる太に、途中で、気がついた。
「兄貴、こんなところで何してはるんですか」
太がとぼけた声を出した。長部についているボディーガードは、橋爪たちよりもさらに数年古顔だ。
「――優さん、あいつは俺にやらせてくれ」
市川が囁き、ふところにナイフを確かめた。市川は、ナイフを得意としていた。ただし、ボディーガードのあの男のほうが、数段うえだといわれている。だから、幹部の護衛役なのだ。
「ひとりでってわけにはいかねえぜ」
橋爪は息だけの声で囁きかえした。「俺たち三人

で、踏むヤマさ」
ふたりはにっと笑みを揃えた。
市川が心持ち先に立ち、橋爪がつづいた。腰をかがめ、気配を殺して接近する。
およそあと二メートル。そこで市川がナイフを抜いた。刃渡りが二十センチほどの登山ナイフだ。橋爪は、一歩おくれてドスを抜いた。そして、同時に、地面を蹴った。
気配のほうが、わずかに先に届いてしまった。男はこちらを振りむかなかった。振りむけばどうなるかを心得ていたのだ。前方に跳びのき、太に肩からぶつかっていった。太の躰がボンネットによろめく。男は車の鼻先に回りこんだ。回りこみながらポケットに利き腕を差しいれ、素早く得物を引きぬいた。振りむきざまに、刃先をななめ上方へ跳ねあげた。市川のスーツの上地が、和紙のようにはらりと切れた。場慣れした男だ。一対三。刺せば引きぬくまでのあいだに、他からの攻撃を受けることになる。そのことを、よく、知っているのだ。
「橋爪に、市川か。音頭は、大方、優作ってとこかいな」
つまらなそうに、呟いた。巨体だ。橋爪たちを、蔑むように見おろしている。「アホやな」唇のはしから、押しだした。たしかにそうだ。橋爪はちらっとそう思った。理は、おそらく、長部を守ろうとするこいつにある。長部はいまや、組の最後の要なのだ。
「お互いさまやで。飼われてるだけで、あんたは頭を使おうとせん男や」
市川が喉につめた声で呟きかえす。ちらっと視線を左右に振り、顎の先で橋爪たちに合図した。太が男の左側に回る。橋爪は車の後方をかすめ、エントランスの階段の足もとにむかった。
一歩、市川が、踏みだした。中根が男のほぼ後方まで移動したとき、正面の市川が突っこんでいった。
男はナイフを左手に持ちかえ、地面と平行に走らせた。それで市川を牽制しつつ、利き腕を上着の内側に動かした。ひとつづきの動作の帰結として、右肩を太のいる方角にむけた。
光った。光は夜の闇を走り、太が悲鳴とともにのけぞる。ペン・ナイフが放たれたのだ。ブレードが薄い、研ぎすまされたナイフだ。そうと知ったのは、

時間が経ってからだった。わずかでもタイミングがずれていれば、喉か額かを刺しつらぬいていたことを知ったのもそうだ。

男が光を放った刹那、躊躇なく橋爪は踏みこんだ。橋爪に対峙した方角だけ、かすかな隙が生じていた。

隙は、すぐに霧消した。男は爪先を繰りだしてきた。太股の外筋の瞬発力で、まっすぐに爪先を蹴りあげた。腕に鋭い衝撃を感じ、橋爪のドスがふっとんだ。

市川がナイフを振りおろす。浅い。しかし、はずれなかった。男の額から頬にかけて、ぱっと赤いものが散った。目を、わずかにそれたらしい。市川は勢いにのって突きかけた。男はうしろへ下がらなかった。やわらかく膝を使い、躰をすっと沈めながら、真下から腕をはねあげた。

市川の利き腕からナイフが落ちた。高圧線に触れたかのように、うしろの地面へ転倒する。

橋爪のほうを、男がむいた。橋爪はドスに駆けよろうとした。背中から男が追ってくる。ドスとの距離。男との距離。どちらに分があるかわからない。躰を投げた。

ドスの柄をつかむまで、一瞬だが時間がかかった。転がり、男にむきなおる。のしかかられようとしていた。

膝を引きよせ、渾身のバネをきかせて蹴った。腹を、狙っていた。男は後方に押しもどされ、車のボディに背中をつけた。

かっと、両目を見ひらいた。操り糸が切れたように、右手が地面にむかって垂れる。登山ナイフを握った手だ。登山ナイフは、自らの重みで男の手をゆらしたのち、アスファルトに乾いた音を立てた。

両目が橋爪を睨んでいる。背中に張りついたゴミを払うように躰をひねりかけ、そのまま地面に倒れふした。

背中から、ナイフの柄が生えていた。車のむこうに、血のしたたる右手でナイフを投げおえた、市川剛が立っていた。

市川は、橋爪を見やってにっと笑った。

女のマンションからすがたをあらわした、長部をしとめるのはたやすかった。

おめえら、組を潰すつもりか。長部はうめくよう

に呟いた。あんたのやり方は気に入らんのや。市川がいった。気に入るかどうかの問題じゃねえんだ。もう、こうなっちまったってことなんだぜ。それが気に入らへんのや……。橋爪たちは、長部の死体を、ボディーガードの男と並べて車のトランクにおさめた。両膝を折らせ、互いに互いを抱きかかえさせて詰めこんだ。大の男がふたり。なんとも窮屈な感じじゃないか。

「兄貴、でっかいお月さんや」

トランクの蓋を音を立ててしめると、太が空を指さした。林檎の断面のような色をした月だ。ぼんやりと模様が浮きたっている。ここまで乗ってきた車のステアリングを橋爪が握り、長部が乗るはずだった車は市川が移動させた。太は左頬を深々と抉られた血がとまらず、車の床にあったボロ布で押さえつづけた。

「グラブ・コンパートメントのなかにウイスキーがある」

橋爪が前方を見つめたままで告げると、へいとうなずき、ターキーの携帯瓶を取りだした。本革を巻いたステンレス製のスキットル・ボトルだ。革は焦げ茶。

橋爪はステアリングから片手を離し、スキットル・ボトルをもぎとった。

「ボロ布をはずせ」

命じながらウイスキーを口に含み、勢いよく噴きつけた。

太は小猿のような悲鳴を上げ、大げさに頭をのけぞらせた。

大阪湾にむかって走った。市川は長部の車を人気のない駐車場に乗りすて、橋爪の運転する車に移動した。

「手は、大丈夫なのか」

橋爪が訊くと、なあに、と首を振った。「そんなやわにゃあできとらんがな」

海は、静かに、たゆたっていた。

三人は死体を始末する前に、自動販売機で買った炭酸飲料を車のなかで飲んだ。炭酸がひりひりと喉にしみて心地いい。右の窓も、左の窓も開けはなってあるために、風が橋爪たちを素通りしていく。素通りしながら気配を貼りつけていく潮風だ。汗ばみつづけていた皮膚が乾き、かすかに泡だつ気配を感

じた。
「兄貴、組はどうなるんですやろ」
太が橋爪に顔をむけた。
「わからねえな」
「兄貴は、これからどないしはるんですか」
「わからねえな」
でも。さっぱりしやしたね。太は微笑み、炭酸飲料を傾けた。やっぱりスカッとするのがいちばんや。腹の底に抱えこんどいたって、しょうもないですわ。橋爪はちらっと市川の顔を見やってから、無言で太に微笑みかえした。
そこに、ベルが、重なった。
——またあの夢だ。布団から手をのばし、目覚まし時計のベルをとめた。天井は暗い。午前三時。四時には出勤していなければならない市場の仕事だ。そろそろ柑橘系の果物が多くなる季節なので、台車にかかる重量が増してきつくなる。ネコと呼ばれる台車だ。
台所で、身重の妻が使うまな板の音がしている。橋爪はいま見た夢を思いだしながら、欠伸をはなって首筋を揉んだ。
すべてが、むかしのことだった。
光が尖っている。
灰色の波。
無数のしわの連なりが生まれ、押しやられ、砕けている。
明けはじめた空に、いく重かにわたり、雲の層ができている。隙間から褪せた光が漏れ、〝天使の階段〟をつくっている。鷗が数羽、風に巻かれ、呪縛のなかを泳いでいる。あるものは高く、あるものは低く、横なぐりの風に曳かれている。
空を見た。星が消え、新しい光に塗りこめられようとしている空だ。
遠くでひとつ汽笛が鳴る。南へくだる貨物列車が、車輪の音を響かせている。
《八百源》の荷台へ二往復蜜柑を運んだ。
灰色の波形屋根をかぶったコンクリートの二階建て。商売を競う事務所が十三、入っている。海岸線にそって広がる、野球場ほどの敷地を持つ市場だ。青果市場と鮮魚市場が、道一本へだてて隣接している。事務所へもどると、空のネコにバナナを積みな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

おした。あと五往復ほどでひと段落する。
終るまでは、黙々と往復するだけだ。それが、橋爪の習慣だった。習慣どおりのことをつづける。面白いわけじゃない。かといって、習慣を壊しても面白くなるわけじゃないはずだ。
腰と両腕でネコのバランスを保ちながら、引く。甘たるい匂いのこもった通路を進みながら、今朝見た夢がふっと脳裏をよぎった。
仕事の前には必ずあの夢を見る。
市場の仕事じゃない。副業を済ませる前には必ず見るのだ。理由を考えたことはなかった。

1

スクーターでの移動にもってこいの季節だ。
午後三時。仕事をおえた橋爪は、青果市場の駐車場のはしに駐めたスクーターにまたがり、ヘルメットのバンドを顎にまわしてとめた。駐車場は、がらんとしていた。市場は、すっかり眠りについている時間だ。橋爪の出勤は午前四時。平均して、毎日十時間から十二時間は拘束されることになる。休みは日曜と祝日、盆休みと年末年始の三日だけ。それでも、こうして日の高い時間に自由になれるのは、悪くない。
片がけにしていたナップザックを両肩にしょって、エンジンをかけた。走りだすと、さらさらとした風が顔にあたった。ヘルメットの左右の隙間から耳のある位置に侵入し、うしろ髪を気持ちよく撫でながらぬけていく。夏のあいだの煮つめたような潮のか

おりが、風にうすめられているのを感じた。
海岸線にそって走った。日本海だ。ごつい岩場が、つらなっている。手前に、野菜畑が並行してのびている。数百メートルおきに、小さなほったて小屋が建ち、農家の人間が野菜を売っていた。大方は無人の店だ。代金は箱のなかへという立て札があるきりだった。
およそ二十分ほどで目的の場所についた。海を背にして、海の家が建っている。土産物屋と海水浴用の休憩所がならんでいた。海岸線は、岩場から砂浜にかわっている。海の家は、店を閉じて、閑散としていた。
店の裏手にスクーターでまわった。ぺんぺん草のはえた、店と砂浜の斜面との隙間にスクーターを駐めた。エンジンを切る。海のほうからは丸見えの場所だが、季節はずれの砂浜には、人のすがたはひとつもない。ゴミを根こそぎさらっていったのだろう、砂のうえに、ブルドーザーのキャタピラのあとが残っている。波うちぎわが、湿った砂と打ちあげられた海草で、遠目にはにじんだ灰色に見えた。
海の家の正面にもどった。それから、道を少し歩いたのち、舗装道路のガードレールに海のほうをむいてすわった。
ゆるやかな弧をえがいた海岸線が、右へも左へも広がっている。右手には、岬の突っ端に建つ白い燈台が見える。ナップザックを足もとにおろすと、薄手のジャンパーのポケットからたばこを取りだし、左の掌に吸いくちを打ちつけて葉をつめた。
舗装道路を走る車はほとんどない。潮騒と、鳥の声。太陽はまだかなり高い位置にある。橋爪の影が、足もとから三、四十センチばかり、躰の前に落ちている。ゆっくりと、時間をかけてたばこを喫った。
たばこがすべて灰と化すころ、一台の白いセダンが、橋爪がさっき走ってきた方角からやってきた。
橋爪の、ちょうど真うしろに停まった。
運転席側の扉が開き、男がひとり、おりたった。初老の男だ。
「悪いな。待たせたか」
「いや、いま来たところだ。あんたがちょうど、オン・タイムさ」
橋爪は自分の腕時計をさして、微笑んだ。
腕時計は、三時半をさしていた。ナップザックを

持ちあげて、ガードレールを乗りこえた。助手席の扉を開け、乗りこんだ。
運転席におさまりなおした男が、すぐにギアを入れなおした。バックで海の家の建つ方角に入り、ステアリングを切りかえして進行方向をかえる。たったいま来た道を、もどりはじめた。
初老の男の名は、万田十蔵。六十を二つばかり越えている。本人は、初老だと思ってはいなかった。薄くなりかけた頭髪に、黒い髪を見いだすのは困難だった。額に三本、深い皺が、律儀に同じカーブをえがいて走っている。鼻尖が左右の鼻孔を押しつぶしているようにさえ見える団子っ鼻だ。頬骨がごつく張りだしている。そのために、いくぶん顔が大きい印象をあたえる。
「うしろのシートに、着がえがある」
万田がいい、顎をかるく回すような仕草をした。
橋爪は、躰をひねり、シートのまん中の隙間から後部シートに手をのばした。
新品の、白いYシャツを取りあげた。
前方にむきなおりながら、ビニールを破って開けた。ジャンパーとポロシャツを手ぎわよくぬいで、その新品のYシャツに着がえた。それから、ぼてぼてのズボンをぬいだ。ふたたび後部シートに手をのばした橋爪は、スーツのツーリスト・バッグを取りあげた。薄いグレーのスーツの、まずはズボンを取りあげ、はいた。ネクタイをしめ、最後に上着を着た。ネクタイは、臙脂のストライプだった。
ツーリスト・バッグを後部シートにもどし、空のショッピング・バッグを持ちあげると、無造作にぬぎすてておいたズボンとポロシャツとジャンパーを、すべて丸めてそのなかに入れた。
「眼鏡は？」
万田に訊く。
「グラブ・コンパートメントのなかだ」
黒縁の眼鏡を、取りだしてかけた。黒縁眼鏡にはまっているのはただの硝子で、度は入っていなかった。
リア・ビュー・ミラーを自分のほうにむけて、ネクタイの結びめを丁寧になおす。
そんな格好をすると、それまでは三十歳ほどにみえていた三十五歳の橋爪が、逆に四十ちかいような感じにみえた。首筋と手の甲がよく焼けている。手

は大きく、ごつく、節くれだっている。ナップザックのポケットから、櫛と整髪料を取りだして、ぼさぼさだった髪を整えはじめた。

Yシャツからネクタイ、眼鏡にいたるまで、橋爪が自分で選んだものだった。ただ、ここまでの運搬を相棒にたのんだだけだ。

そのほうが、計画にとってスムーズだった。

冷たい缶コーヒーと、熱い缶コーヒーとを、一本ずつ買った。

路上駐車した車にもどり、熱いほうの缶コーヒーを万田に差しだした。

白のセダンは、夕闇にからめとられようとしていた。セダンはいま、石畳をしいた、細い道に駐車してあった。路地にならんでいるのは、壁色のしぶい、日本家屋だ。大方がお茶屋として営業している。

京都市、祇園。日本海岸の田舎町からは、百キロちょっとの距離だった。琵琶湖の西につらなる、いくつかの山を越えてきた。アップ・ダウンを繰りかえす、二時間ほどの道のりだった。

この路地は、東西の方向にのびていたので、フロント・グラスの先には東山が見えた。ほとんど昏れかけている空が、うっすらと稜線を浮かびあがらせている。瓦屋根のあいだから見える東山は、思いのほか間ぢかに感じられた。西にある光のなごりを、真正面からあびているために、深みをました樹々の緑がほんのりと浮きたっている。

三味線の音が、遠くで聞こえた。

「最近は、カラオケなんぞも置いてあるそうじゃねえか」

万田が、いった。

「茶屋のなかにかい？」

「さすがに、外に音がもれねえように、土蔵を改装してカラオケ・ルームにしたり、昭和の初期の流行でつくったダンス・ルームをカラオケ用に使ったりと、それなりの工夫はしてるらしいがな」

橋爪は、コーヒーを啜った。

目をほそめて、

「いいもんだな」と、いった。

「まさか」

「違うさ。あれだよ」

万田は、じきに、相棒が三味線の音をいっている

らしいと気がついた。途切れとぎれに、風に運ばれ、か細い弦の音が流れている。
「そろそろだろ」
しばらくしてから、あらためて万田が口を開いた。
「なにがだ？」
「決まってる。おめでたさ」
「そうだな」
「なんでえ、嬉しくねえのか？」
「そんなことはないさ」
「そう見えるぜ」
橋爪はまたコーヒーを啜った。
「おたくのは、いくつになるんだ？」
「上のガキが小学校の四年生。下はまだ幼稚園さ」
「なあ、ひとつ訊きてえんだが、実感はあったか。つまり」
「わかってるさ」
と、万田が話を引きとった。「ガキが生まれる前に、てめえが父親になる実感があったのかといいてえんだろ」
ちらっと万田を見た。自分が尋ねたかったのは、もう少し違う実感のような気もしたが、わからなかった。「ああ」と、とりあえずうなずいて見せた。
「そんなものは、生まれてきちまえばじきに芽生えるもんよ」
「そういうもんなのか」
「ああ、そういうもんなんだ」
「なにを買ったんだ」
後部シートを視線でさした。後部シートには、新京極の土産物屋で買った紙づつみが置いてあった。祇園にいたる手前で、車のなかに橋爪を待たせ、万田がひとりでいって買ってきたのだ。
「だるま落しと山吹鉄砲だ」
「いまどき、そんなものを喜ぶガキがいるのか？」
「うちのガキは、いいガキなんだよ」
橋爪は飲みほした缶を足もとにころがし、ポケットからたばこを取りだした。
くせとして、吸いくちを掌に打ちつけた。
「もしかしたら」と、万田。「ちょうど、いいきっかけなんじゃねえのか」
無言で目をむける橋爪から目をそらし、言葉をついだ。
「つまり、俺たちのこういうことをカミさんに話す

のにって意味さ」
「話さなけりゃならん、理由はないだろ」
「だが、夫婦のあいだでの隠しごとは、なるだけ少ないほうがいいんだぜ」
一拍おいて、さらにつづけた。
「俺との仕事を、ずっとつづけていくつもりがねえなら別だが、そうじゃねえなら、いっそ話しちまっとくほうがさっぱりするように思うんだがな」
「――」
「どうなんでえ。正直いって、隠したままじゃ、なにかと不便なんじゃねえのか」
橋爪は右手の指先で顎のしたをかいた。
「なあ、万さん。もうひとつ訊きてえんだが」
「なんだい、相棒」
「あんたは猫舌なのに、どうして一年中いつでも熱いコーヒーを選ぶんだ」
「なんだよ、話をそらすのかい」
「そうじゃねえさ。ときどき、気になってたんだ」
万田はドアの缶たてから、缶コーヒーを取りあげた。
「アイス・コーヒーは好かないね。アイス・ティーならいいんだが、コーヒーは熱いやつを飲むべきさ。たとえ、缶コーヒーでもだ」
いいながら、缶のタブを引きおこした。

最後の盗聴によって得た情報で、秘書のやってくる時間はわかっていた。
わかっていた時間よりもきっかり十分前に、その男はあらわれた。
ダーク・グレーのスーツ。縁なしの眼鏡。頭髪は、まん中よりもやや右側に分けめをつくり、ポマードでうしろへ撫でつけていた。中肉中背。ほぼ、想像したとおりの男だった。黒いアタッシェ・ケースを、ぶらさげている。
「あれか」と、万田に確認した。
万田は男の顔を知っていたが、橋爪が男を見るのは初めてだったのだ。万田が、そうだ、とうなずいた。
橋爪は内ポケットから黒縁眼鏡を取りだして、かけた。男が車を駐めたのは、いくつかのお茶屋が共同で借りている駐車場だった。駐車場は、お茶屋の正面玄関がつらなる路地からは、さらに一本裏手に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com